研究室 居住空間研究室　教員 郡 裕美　カテゴリー 建築・土木・社会基盤

歴史的建物の再生と新たな価値の創造

―伝統的な建物、古民家の再生、実践的研究プロジェクト―

兵庫県たつの市、大阪市住吉区、京都市、千葉県佐原などで、歴史的建物の再生を手がけ、そこに新たな価値を創造し、伝統を現代に生かし、歴史を未来に繋げる実践的研究を行ってきた。
このパネルでは、主に2015年度の建築学会賞（業績）を受賞した千葉県香取市佐原の「事例を発表したい。佐原が重要伝統的建造物群保存地区に指定された1996年より、私たちは、佐原の町並みの保存修復に関わる数々の設計業務を遂行してきた。1999年に完成した「しゅはり」から、東北大震災の被災地にもなった佐原の復興拠点として、一昨年に完成した「いなえ」まで、その間に私たちが手けた物件は延べ15件、現在も１件が進行中である。 それらの設計を進める中で私たちが心がけてきたことは、「作らないで創ること」。もちろん、歴史的町並みの修復は単純な修繕とは違い、設計者に「作る」ことが求められる。原型をとどめないほど老朽化した古家では類似事例の研究をし、想像力を働かせながら歴史の形を再現し、火事で消失して歯抜けになった場所では隣接建物の調査をし、かつてそこにあった古建物に思いを馳せながら「町並み保存」の視点で新築の建物も設計した。その折、私たちはなるべく「作らないこと」つまり、設計者が透明になることを目指してきた。 しかし、町並み保存の目的は歴史の再現ではなく、それを通して私たちの生活がより文化的で豊かになることである。そこで、「創ること」が私たちの仕事だと位置つけた。それは、ハードとしての建築をこえたソフトとしての建築、すなわち人々の心に響く「空間を創る」ことである。

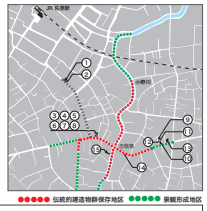
●喫茶「エデンの東」（兵庫県たつの市）
（1998インテリアプランニング賞 建設大臣賞受賞）
（1998兵庫県さわやか町づくり 町並み部門賞受賞）
看板建築となっていた店舗を町並みに合わせて再生。町と柔らかくつながる空間が再生された。

●ギャラリー「クラシック」（大阪市住吉区帝塚山）
（2002 大阪都市景観建築賞受賞）
土蔵を再生。蔵の風景を楽しめる中庭付き集合住宅「Will帝塚山」を新築。町並みに新しい息吹が付加された。

伝統的建造物群保存地区の町並み再生の事例

―千葉県香取市佐原の再生プロジェクト一覧―

佐原は江戸の水運の拠点として栄えた町で、小野川、香取街道沿いに江戸から昭和にかけての建物が多く残っています。しかし、そのほとんどは、時代と共に何度も改装が重ねられた結果、元々の形が分からなくなっていた。そこで、佐原の町を踏査し、伝統的な建築の形を探し出し、そこにあったであろう町と建物、ウチとソト、公私の関係性を再解釈し、個別の建物に当てはめ~~ていった。同時に、各々の建物の機能~~、施主の要望、現代の材料や工法、設備や構造をそこに重ねていった。伝統のかたちを念頭に置きながらも、未来につながる建築を設計することを心がけた。



① しゅはり [1999]

改修前、軒は切られ、母屋は２つの店舗に分断されていた。改装にあたって元々の構造、間取りを調査し、その空間性を生かしながら町に開かれた不動産店舗の提案をした。
また、表には伝統的な格子戸の代わりに、看板も兼用する透明な強化ガラスを設けた。これは、風景を映し込みながら内部の様子を伝え、格子の半透明な性格をもつ。伝統を現代に翻訳しつつ、柔らかい境界を持つ設計とした。

② 小森家 洋館 [2004]

改修前、正面の建具はアルミサッシに変えられ、欄間のステンドグラスは撤去され、２階の欄干は崩れていた。そこで、古写真を参照しながら、建具、ステンドグラス、ファサードの修復をした。

③ いなえ（西ノ宮）母屋 [2007]

文具店として使われていた母屋の軒は切られて看板建築となり、階高もかさ上げされていた。
度重なる改装と増築の結果、裏に控える５軒の建物群と不可分に絡み合っていた。
増築部分を切り離し、階高を下げ、軒を復元し、構造補強し、表に格子戸と硝子戸からなる軒下空間を作った。床の間には、古家の廃びたトタン板を用い、歴史の時間を楽しむ仕掛けを提案した。

④ いなえ（玉澤家）母屋 [2008]

もともと乳母車店であったこの商家は、軒が切られて看板建築となっていた為、軒を復元し、古写真を参照しながらファサードを復元した。著しく痛んでいた内部の構造材も新くした。伝統的な骨組みを楽しめる開放的なプランとした。佐原の特産品を販売する店舗という性格上、通りとも、裏の中庭とも、視覚的なつながりを感じられるように、透明ガラスの建具を用いた。

⑤ いなえ（西ノ宮）洋館 [2010]

洋館は、母屋、増築部、土蔵と絡み合い、もとの形が分からない程に老朽化が進んでいた為、小屋組をのぞき、全て新しくする必要があった。
そこで、柱や梁のほぞ穴や、類似の洋館の古写真を参照しながら、洋館を再建した。保存された小屋組を楽しめるよう、天井は現しとした。

⑥ いなえ（西ノ宮）蔵 [2010]

著しく老朽化していた土蔵は、洋館と接続されており、そのままでは改修が難しい為、足場をして洋館と建した。
その後、基礎をやり直し、構造補強し、壁と屋根の修復をした。
ギャラリー空間として天井の高い蔵の骨組みを楽しむ為、天井から古い蔵にあったトタン製の鬼瓦を吊るした。

⑦ いなえ（西ノ宮）倉庫 [2012]

倉庫は、著しく老朽化していた上に、母屋や蔵など他の付属屋と分離しがたくつながっていたため小屋組以外、ほとんど全て作り直すことになった。
母屋と渡り廊下でつなぎ、天井の高い開放的なカフェ空間へと生まれ変わった。

⑧ いなえ（西ノ宮）中庭 [2012]

母屋、洋館、蔵、倉庫などを分節し、その隙間の屋根を壊すことで中庭を生み出した。
時代も建築スタイルもまちまちな建物が乱立する不思議な建物配置に、敢えて整合性を求めず、折り重なった時間層を感じられるような空間構成とした。
苔むした土蔵の基礎石を敷き、被災地である佐原の、震災で落ちた古瓦を使ったオブジェを置き、歴史と対話できる場を提案した。

⑨ 下町 土蔵 [2002]

はじめてその土蔵を訪れた時、そこは、漆黒の闇に包まれていた。唯一ある窓から差し込む光が印象的だった。そこで、光を楽しむ仕掛けを持つギャラリーを提案した。
磨り硝子状の箱を、窓の内側に設置すると、箱の表皮には外の景色や窓の鉄格子の影が映り込み、生き物のように息づく。この「光の箱」は開閉可能な換気窓でもあり、夜は照明器具となる。当初、週末住宅の茶室として計画した。

⑩ カフェ しえと [2004]

改装前の母屋は、通りにそって腰板付のガラス戸とカーテで閉鎖過ぎな外観で内部は陰気な空間だった。
そこで、通りに面して格子戸とガラス戸を新設し、軒下空間を作り、緩衝領域を設け、また、台所の床を張って通り土間を作った。
すると、町と建物が中庭までつながって開放感のある店内となり、また、おもての気配を感じながら、ゆっくりとくつろげるカフェが生まれた。

⑪ しえと 味噌蔵 [2006]

カフェの中庭に立つ味噌蔵は、用途を限定しない自由な空間にしたいというオーナーの意向に答えて、何でもできる舞台のような場所を提案した。
庭の伊勢砂利を部屋の中まで敷き込み、ベンガラと墨で染めた床をつくった。間接照明で浮かぶ漆黒の床は、時空をこえた異次元のように感じられる。

⑫ しえと 中庭 [2006]

この下町の家は、中庭のまわりに母屋、蔵、味噌蔵という伝統的な住棟配置が残る貴重な例であった。
そこで、地元の人や観光客が町並みの延長として楽しめるよう、庭を開放する提案をした。母屋に中庭を楽しむ縁側とベンチも作った。
伸びすぎたシュロは、あえてそのままにして、廃墟感を残し、古井戸の周りにゴロタ石を敷き、古の記憶がそこから拡がっていくイメージの庭の景色をつくった。

⑬ 八坂の家（山村家）[2003]

昭和初期に建てられた山村家の改装にあたって、佐原の伝統的な町家の構成要素である格子戸に加えて、その内側にガラス戸を設け、新たに軒下空間を作った。
その結果、通りと建物との柔らかい関係が生まれた。現在、１階はギャラリーとして使われている。

⑭ 本橋元町家 [2003]

表の建具は、検討を重ねた結果、細細な格子とした。
現存する古写真では、腰板付きのガラス戸になっているが、調査の結果、もともとこの内側に建具があったことがわかり、ここでも、格子戸＋ガラス戸で町と建物を柔らかくつないだ。
現在、店とつなげて、中庭を楽しむ飲食店を設計中である。

⑮ 佐原千与福 [2005]

火事で消失した奈良屋跡は空き地となっており、小野川の町並みはとぎれていた。そこに、建主、佐原まちづくり公社からも行政からも、町並みにあわせた建物の新築が望まれた。
そこで周囲の軒高や屋根勾配などを調査し、この地にふさわしい蔵のレストランを新築した。一方、空間構成は現代のニーズに応えられる様に、伝統にとらわれない構造や工法を選び、伝統と現在の共存を心がけた。